

生徒の実態、種目の特性を生かした単元指導計画

～「場の設定」「学習内容」「指導内容」に着目して～

笠原中学校 保健体育科 小野秀也

1 授業改善の視点

本校では、生徒の運動欲求を満たすことを前提として、「運動の側面」「集団の側面」の2つの面を関連させながら単元指導計画を作成し、授業を進めている。生徒の実態や種目の特性を考慮し、「場の設定」「学習内容」「指導内容」の3点を単元指導計画を改善する視点として持ち、以下のような実践を取り組んだ。

2 具体的な実践

(1) 生徒の実態に合わせた「場の設定」

【1年生 バレーボールの実践より】

初めてバレーボールに取り組む生徒が、バレーボールの楽しさを味わうには、ルールやボール、ネットの高さがとても重要であるため、生徒の実態に合わせて以下のように「場」を設定した。

○ボールの選択の場

バレーボールとソフトバレーボールを準備。生徒にボールの違いをつかませどちらが扱いやすいかを比べさせた。

→ソフトバレーボールを選択

「ボールが当たると痛い」といった不安要素を取り除くことができる。

○ネットの高さの場

200cmと220cmの2つのネットを提示し、サーブの練習や試しのゲームを行わせた。

→220cmを選択

「サーブの軌道が高くなり、生徒がボールの下に入りやすくなる」ためラリーが続きやすくなる。

○独自ルール作成の場

サーブを行うラインを3mネットに近づける。

→多くの生徒がサーブを相手コートに入れることができ、「ラリーの継続」へとつながる。

(2) 学習内容の精選

【1年生 ソフトボールの実践より】

1年生でも、ゲームの攻防といったソフトボールの楽しさを十分に味わわせるために「打撃」を中心に考えた。「打てる」ことで進塁や得点をする楽しさを味わい、またそれを阻止することで、失点を少なくする楽しさを感じることに繋がった。

そのために、ボールをミートする技能を身につけさせることを単元の活動の中心に置いた。まず、静止している状態のティーボールから、動いている状態のトスボール、そしてピッチャーが投げるボールへと段階を踏んで練習させることにした。こうして「打てる」楽しさを味わせたあと、単元後半には、ゲームを取り入れ、実践の中で自分やチームの課題を見つけ、解決していく学習を展開できるようにした。



(3) 指導内容のステップ化

【1年生 バレーボールの実践より】

相手コートにしっかりボールを返すためには、基本となるボール操作、身体操作が必要になる。そこで、単元を大きく2つのステップに分けて指導した。

第1ステップ

トスやレシーブなど基底技能の力をつける

第2ステップ

ボールの下に入るための身体操作（空間認識）の力をつける

<バレーボールにおける基本的指導過程>

過程		(それらしく) できない → (それらしく) できる		
運動の姿 ○ボール保持者		1. ○ボールの正面・真下に入って直接返球する。 → ○ボールの中心をこらえたサーブをする。 → ○パスをつないで返球する。 → ○安走したパスをつないで返球する。 → ○ボールの方に体を向けて近づいて構える。 → ○ボールが来たところにつき自分の位置に戻り構えてボールを待つ。 → ○オーバーハンドパスやアンダーハンドパスから前衛につないで返球する。 → ○空いた場所をねらって返球する。		
指導内容	攻防・連係	攻 ・サーブがコートに入る。	防 ・コート内に高く、深く、大きく返球して攻撃。	攻 ・狙ったところにサーブが打てる。
	ボール操作	防 ・直接返球。	防 ・カバーリングから2~3人の連係パス。	防 ・相手が上げにくい所を見つけて返球。
	身体操作(空間認識)	防 ・落下点の真下に入る。ボールの正面に入る。	防 ・ボールを高く上げる。	防 ・サーブレシーブからトスにつないで攻撃。
	身体操作(空間認識)	防 ・オーバーハンドパスとアンダーハンドパスの使い分け。	防 ・ボールを中央に上げる。	防 ・サーブレシーブから前方向へ2~3人の連係パス。
達成めど	1年生			3年生

上記の表は、そのステップをさらに細分化した基本的指導過程である。これを作成することで、指導内容を整理した。

3 実践を振り返って考えられること

生徒の実態を考慮した「場の設定」は、生徒が安心して学習するために不可欠だと感じた。「学習内容の精選」や「指導内容のステップ化」については、その種目でどんな技能を身につけさせたいのかを、基本的指導過程を作成することで整理できた。その結果、生徒にも単元の出口での姿や活動をイメージしやすくなり、互いに具体的なアドバイスや援助をすることができた。

